

第27回防衛問題セミナー 講演録

演題：米軍横田基地の任務について

- 1 講演「横田基地の任務」
- 2 映像「ダマヤン作戦」
- 3 映像「クリスマスドロップ」
- 4 講演「基地各群の役割」

講師：第36空輸中隊 モートン大尉（航法士）

第374航空医学中隊 ベイカー大尉（聴覚学者）

第374軍支援中隊 ヒッキー大尉（人事管理官、部隊主要施設改善計画及び
日本政府建設事業管理官）

第374航空機整備中隊 トムズ中尉（航空機整備部隊副担当官）

【司会】

それでは18時になりましたので、始めたいと思います。

それでは、主催する北関東防衛局を代表しまして、企画部長の島真哉から
ご挨拶させていただきます。

【北関東防衛局企画部長 挨拶】

皆さんこんばんは 北関東防衛局企画部長の島でございます。本日は皆さん
お忙しいところ、また、このような寒い中、わざわざお越しいただきましてあ
りがとうございます。主催者側を代表いたしまして、一言御挨拶申し上げます。

私たち北関東防衛局の役割の1つが自衛隊や米軍の活動につきまして、国民
の皆さんに、少しでも知ってもらい、いろいろな理解を深めてもらうために、
仕事をさせていただいております。このセミナーもその施策の1つとして実施
しているものでございます。今回は皆さんのお住まいに隣接している米軍横田
基地について、各群の講師の方に講演をお願いしたところでございます。

さて、本日のテーマは「横田基地の任務について」ということでござい
ますが、その他に昨年台風30号で、甚大な被害を受けましたフィリピンの被災
地を支援しました「ダマヤン作戦」について、あまり知る機会もないようなお
話しもお聞き出来るということでもあります。また、ミクロネシア諸島に空中か
ら援助物資を投下するという「クリスマスドロップ」といった支援活動につ
きましても、各群の講師から説明していただけるということでございます。

こういったお話を通しまして、少しでも横田基地の役割や活動について、ご
理解いただければと思っています。

最後になりますが、今回のセミナーを開催するにあたりまして、ご協力いた
だきました武蔵村山市商工会の皆様、また、横田基地の関係者の皆様につ
きま

しては、この場をお借りして厚く御礼申し上げます。

【司会】

続きまして、横田基地を代表しまして、第374 使命支援群司令官のブラウン大佐からご挨拶をいただきます。

【第374 使命支援群司令官 ブラウン大佐 挨拶】

こんばんは。私は第374 使命支援群司令官のブラウン大佐です。よろしくお願いいたします。

挨拶の前に、皆さんに1つ質問したいと思います。

私は横田基地に新しく着任した軍人に対して、同じような質問をするのですが、今日は皆さんに同じように質問させていただきます。

皆さんに対する質問は、「なぜ米軍がこの横田基地に駐留しているのでしょうか」です。なぜだと思われませんか。

この質問を聞いて、たぶん、皆さんの頭の中には何かしらのアイデア、考えがあるかと思います。

どなたかお答えできる方はいらっしゃいますか。

【聴講者1】

横田に基地があるということは、やはり、極東にアメリカの方から人とか物資が来たりするので、極東の拠点として存在する意味があるのではないかと私は思っています。横田を中心に東南アジアやフィリピンの方へ足を延ばすための1つの基地ではないかと私は思います。

【聴講者2】

法律的には、日米安全保障条約が基本になって日米同盟を結んでいますので、法律に基づいたものではないか、それに基づいた基地ではないかと思えます。

【ブラウン大佐】

今のお答えが、私が今まで聞いてきた中で、正解に一番近いものだと思います。

横田基地が、そして米軍が、なぜ日本にいらっしゃるのかについて、私なりに正解だと思われることを皆さんにお話しさせていただきたいと思えます。

今日、このセミナーをお聞きになって、お帰りになりましたら、お友達や家族にそのことを話していただければと思えます。

アメリカ側だけがそういうことを知っているのではなく、やはり隣人である皆さんもそういうことを知っていただければと思います。

在日米軍司令官のアンジェラ中將が、このようなブリーフィングを行うとき、そして、私が正解ではないかと思っている答えは、横田基地、在日米軍が日本に存在する意義というのは、日本を防衛するということが最大の理由です。おそらくこれはあまり多くの人々に理解されていないと思います。1950年代に日米安全保障条約を結びまして、その条約があるからこそ、私たちが日本に駐留しております。

2番目の意義は、太平洋地域を安定させるということなのですが、中国や北朝鮮の存在がありますので、それを安定させるということですが、それよりも第1番目に私たちが存在するという意義は、日本を守るということに尽きるかと思っています。

それを念頭においていただきましたら、政治的なことや何か事件が起きたとか、航空機の音がうるさいとか、そういう問題があるのに、なぜ横田基地が自分たちの裏庭に存在しているのかということに関して、より良く理解していただけるのではないかと思います。

そうすることによって、私たちの任務に対する理解と協力を皆さんからいただけるのではないかと思います。

私たちは、日米安全保障条約で規定されているとおり、日本を守るということとを真剣に捉えております。

私は、今に至るまで日本に駐留して13年になります。7回の違う命令で赴任しておりますが、その間、日本の防衛研究所で研修を受けたこともありますし、また、在日米国大使館では自衛隊が米軍から購入した新しい装備品の使い方自衛隊の皆さんに教えるという仕事もしていました。そして現在は、横田基地第374使命支援群司令官として勤務しております。

このようなセミナーは、本当に良い考えだと思います。今回、横田基地の者がこのようなセミナーをさせていただくのが、第1回目と聞いておりますけれども、なぜもっと早くこういう企画がなかったのかと思っています。

今日は、皆さんに私たちの日々の業務について語らせていただくことで、相互理解が促進出来るかと思っています。

今日は、若い将校たちが来ていますが、日々基地においていったいどういうことをしているのか、それがどのように太平洋地域、また日本を守ることに繋がっていくのかということをお話しさせていただきます。

今日は皆さんがこのセミナーで学んだことを、広げていただければと思います。家に帰られたならば御家族だとか、御家族のご友人たちに語っていただいて、輪を広げていただきたいと思っています。そうすることによって、大きくは、

横田基地周辺の地域の皆さんの理解を深めていただけるのではないかと思います。そしてなぜ私たちが日頃こういうことをやっているのかという理由を皆さんが理解していただければ幸いに思います。

【モートン大尉】

皆さん、こんばんは。本日はお招きいただきありがとうございます。

本日は私たちの任務について、第374空輸航空団がどのようなことをしているのかということについて、皆さんに話をさせていただきます。

私はジェイコブ・モートンと申します。日本に着任して4年になります。先ほどのブラウン大佐のようなまじめなお話しではなく、もっとくだけたお話をさせていただきます。

それでは始めさせていただきます。まず、我々、第374空輸航空団のミッションはこちらになりますけど、西太平洋地域の米空軍の運用と空輸をハブ空港として支援し、遠征部隊をいつでも派遣出来る態勢を整えることにあります。

地図を見てください。私たちはここに居ます。私たちの位置は、物資、そして人員を世界中のいろんな所に運んでいくのにパーフェクトなロケーションです。

次に、私たち横田基地はいったいどういった人で構成されているのかというのが表されています。もちろん現役の軍人、その家族、日本人、アメリカ人の民間従業員などです。

こちらが私が普段運用している航空機で、もちろんご存知かと思いますが、C-130、C-12、UH-1です。これらを使って太平洋地域に起きるあらゆる事態に対応しております。

こちらがC-130ですが、自分で飛んでいますので、一番馴染みがあります。この航空機ですが、戦術空輸というのを行って世界中に様々な物、人員を届けることができます。

写真を見ていただきますと、まず右側上が富士山の写真、左下がフィリピンでの「ダマヤン作戦」の時の写真でございます。

その隣の写真がバングラディッシュでの救助活動でございます。

ここからも分かりますように、私たちはC-130を使って世界中に空輸を行うことができます。

先ほどのC-130はちょっと音もうるさいし、臭いもガソリンというかエンジンオイルのような臭いがするのです。

その他にこちらにあるC-12ですが、軍の高官などを移動させるときに使っております。最後にUH-1ですけれども、こちらは東京近傍で高官などを

輸送するのに使われております。また、時として患者の搬送にも使います。トモダチ作戦では福島第1原発に直接近づけなかったため、現地の様子がどうなっているのかを偵察しました。また少量ですが物資も輸送することが出来ます。

皆さん、フェンスの外から普段より大きな飛行機が横田基地に飛来して来ているのを見たことがあるかと思います。C-5やC-17のような大型の飛行機ですが、これは横田基地内にある第515航空機動運用群というところが担当しておりまして、軍用機もありますし民間機もありますけれども、大量の物資、それから人員を世界中に届けるため活躍しております。

そして、横田基地が一貫してフォーカスしてきたのが、こちらにある人道支援一災害救援です。私たちは幸いにもこれまで横田基地がやってきたこれらの活動に実際に携わってきました。左上の写真は私たちが「パック・エンジェル（太平洋の天使）」と呼んでいるもので、主に西太平洋、アジア各国の子たちに予防接種を施したり、学校の無い地域に学校を建てたりといったことを行っています。

この写真は「トモダチ作戦」の様でございます。こちらが仙台空港で一番に到着したのが私たちのUH-1でした。それから徐々にC-130も着陸出来るようにしまして、最後には滑走路を全てきれいにして、もっと大量の物資を大きな航空機で運べるようにしました。こちらの梱包物は福島第1原発の事故の際に必要なとされた器材を梱包したものでございます。

下の真ん中の写真は、私たちが最近行いました「ダマヤン作戦」、台風30号が直撃したことで甚大な被害が出たフィリピンにおいて行った救援活動です。後で「ダマヤン作戦」のビデオを見ていただきますが、真ん中の写真は被災された方々を私たちのC-130・1機で120人ほどの方を避難するお手伝いをしました。

その隣の写真が、「ダマヤン作戦」で航空自衛隊の皆さんと一緒に協力しながら仕事をしている模様です。日本とアメリカの二国間のパートナーシップは、どちらの国も非常に重要なものだと認識しているわけですが、横田基地においても同じで航空自衛隊と私たち米空軍は、仕事でもプライベートでも一緒に仲良くお付き合いさせていただいております。

先ほども申しましたが、航空自衛隊とは様々な形で交流をしているわけですが、左の上は私たち米軍が行っております「LCL A」、これは低コストで低高度での空中投下の略語ですが、「LCL A」に関して航空自衛隊の皆さんとお話ししているところです。

下の写真は災害時に最初に現場に到着する人たちを「ファースト・レスポンドー」と言いますが、日米間の「ファースト・レスポンドー」たちがどのよう

に災害に対応するかという訓練をしているところです。

その他に航空自衛隊だけでなく、一般の方々に私たちは横田基地のツアーをやっています。上にある写真は航空機を皆さんにお見せしているところです。

その下は福生市の七夕祭で、私たちが毎年御輿を担いでいるものです。

それでは、これから「ダマヤン作戦」のビデオをご覧になっていただき、5分の休憩をはさんでもう1本のビデオをご覧になっていただいた後で、各群の講師から皆さんにお話しさせていただきます。

【映像「ダマヤン作戦」】

(5分間休憩)

【映像「クリスマスドロップ」】

【講演「横田基地各群の役割」】

【モートン大尉】

本日は若い将校が4名いるのですが、私が最初ですので自己紹介させていただきます。

私はジェイコブ・モートン大尉と申します。C-130のナビゲーターをしております。パイロットではないのですが、ナビゲーターとしてパイロットがどこに飛んでいかなければならないか指示をしています。

私の仕事は、先ず安全に人員・物資を空中投下すること、その技術を新しくナビゲーターとしてやってきた者に教えることです。

私が過去に関わってきた作戦は、もちろん「トモダチ作戦」、それと「ダマヤン作戦」にも参加しました。日本に勤務して4年になります。この4年間に太平洋地域の様々な国に軍事演習や様々な理由で行きました。

私は日本が大好きです。その他に私の業務としてはC-130の飛行トレーニングプログラムを作るのですが、飛行ルートやその他諸々のことを私が決めています。この下の写真ですが、C-130が富士山をバックにして写っている写真でとても良い写真だと思っています。

私からは以上ですが、もしここで質問があればお受けします。この後は第374航空医学中隊のタミー・ベイカー大尉にバトンタッチします。

何か質問はございますか。

【質問1】

「ダマヤン作戦」のビデオで夜間の輸送を選んだと言っていましたが、なぜ昼間ではなく夜間なのですか。

【モートン大尉】

「ダマヤン作戦」においては、タクロバンという地域を中心に救援活動を行っていました。昼間はタクロバンには民間の救援物資を届ける民間の救援隊がたくさんいたのですが、彼らは夜間の飛行が出来ないのです。だから、私たちがナイトビジョンゴーグルを使って夜に救援物資や救援隊を輸送することによって24時間休みなく救援活動が出来るということで私たちはあえて夜を選びました。

【質問2】

横田からフィリピンへ飛んでいったとき、その間着陸しなかったのですか。横田からフィリピンまでは無着陸無給油で飛ぶのですか。

【モートン大尉】

私たちのC-130は、まずマニラにあるクラーク基地に飛びました。物資はもっと大型の輸送機のC-17やC-5がクラーク基地に届けていたのです。その物資を私たちがC-130に積み込んでハブからハブへという感じで転々と届けました。1回1回フィリピンに飛んで物資をおろして日本に帰ってくることをしなくて良かったです。距離が非常に長いので日本とフィリピンを行ったり来たりということでしたら本当に長時間飛ばなければいけないので、ハブからハブへという感じで出来たので非常に助かりました。

【ベイカー大尉】

皆さん、こんばんは。本日はお招きいただきありがとうございます。

私はタミー・ベイカー大尉と申します。私は横田基地において聴覚学者、耳の医者をしております。仕事は聴覚テストを行ったり、様々なサービスを提供するのですが、例えば新生児の聴覚テストを行ったり、もちろん大人に対しても聴覚テストを行います。その他には、大きな航空機の騒音や工事現場のような大きな音がするところで作業に従事している軍人や民間従業員に対して、聴覚維持プログラムを行っております。

また、その他に私は事務管理の方でも責任者となっており、病院の事務管理で第374医療群司令官のサポートをしております。

私は耳の医者として、いろいろなミッションに出かけることはしません。というのは、私の技術はそれらのミッションで必要とされていないからです。ただし、病院として「パック・エンジェル」や「ダマヤン作戦」に医療チームを派遣してサポートしています。

「パック・エンジェル」では、2万3千人の患者さんを私たちの医療チームが治療しました。この2万3千人の患者さんを4回のミッションに分けて治療しました。

【モートン大尉】

私もナビゲーターとして航空機の大きな騒音の中で作業しているのですが、彼女がいるおかげで、私たちも聴力を失わないで今でも仕事をする事が出来るのです。

【ベイカー大尉】

医療サポートとしては、基地で行われる友好祭や駅伝、フロストバイトというマラソン大会においても、私たちの医療チームが何かあったときのために待機してサポートしています。

また、地域で行われている防災訓練、去年は神奈川でビックレスキューという防災訓練がありましたけれども、そのような防災訓練にも参加させていただいております。

そして、西多摩保健所と協力して様々な情報交換も行っております。

次に第374 使命支援中隊のダグラス・ヒッキー大尉に引き継ぎたいと思います。

【ヒッキー大尉】

私はダグラス・ヒッキー大尉と申します。横田基地第374 軍支援中隊の最高責任者を務めています。私たちの中隊では、労働力の配分として、何人配属するか、人を雇うということや、様々なサービスなどを担当しております。私たちの部隊は米空軍の中で3番目に大きいレクリエーション及び士気向上プログラムというものを行っております。

実際に中隊の人員は950名おります。その中にはアメリカの軍人、アメリカの民間従業員そして日本人従業員が含まれています。

私たちのミッションはスライドにあるように、「即応力を強化、独創的なプログラムで生産性の向上、隊員及び家族に対するケアの促進、人員のサポート及び訓練、レクリエーション及びフィットネスを含めた生活の質の向上」ということにあります。

私は、部隊の副司令官を務めているのですが、副司令官として5年間にわたる日本政府による基地の工事の責任者を務めております。また、様々なイベントなどを行うにあたり、マーケティングを行うのですが、ここにいる皆さんの中にも自分で経営されている方々もいるかと思っておりますので、マーケティング

グがどれほど重要かはもちろんご存知かと思うのですが、イベントを企画する際には、まずマーケティングを行って多くの人々が興味を持っているイベントを企画します。そのサンプルとして私たちが毎月発行している機関誌をお持ちしました。今、トムズ中尉が持っているのがその機関誌です。

また、私たちの中隊も「トモダチ作戦」に深く関わってきました。我々が行ったのは、具体的には食糧を供給すること、救援隊としてこちらにやってきた人に宿泊施設を提供すること、また、そういう人たちの人事記録を処理することでした。

基地の中には軍人の訓練を行う学校のようなものがあります。それを私たちが運営していますが、最近では米軍人のみならず航空自衛隊の皆さんにも参加していただいで一緒にトレーニングを行っています。

その他には現在沖縄にある遺体安置所をこちらにあるものと統合します。そのための工事を行いますが、これも私たちの中隊が中心となって行っております。これは予算的にも統合した方が削減出来ることと、亡くなった方を本国へ搬送する場合に、横田の方が沖縄よりも本国に少し近いので、航空機で輸送する時間が少なくすむということで、現在計画が進行中です。

友好祭においても私たち中隊が一番多くのことを担当しているかと思うのですが、ここで皆さんに質問があります。「この中に友好祭にいらしたことがある方はいらっしゃいますか。」

ありがとうございました。それでは私の話は以上です。

次に第374航空機整備中隊のラルフ・トムズ中尉に交代したいと思います。

【トムズ中尉】

私は、ラルフ・トムズ中尉と申します。

私は整備を担当する者として横田基地において一番大事な責任、任務というのは、安全で信頼性の高い航空機を提供することです。そうすることによって乗組員がミッションを無事に遂行し、問題なく帰って来ることが出来る、これが私の大事なミッションです。

次に重要なのは、私が使っている整備班の者が安全な機材を使って、また整備がきちんと出来るようにトレーニングするということが大事なミッションです。

スライドでご覧になっていただくと分かりますが、私の下には164名の整備班が働いております。これらの整備班が7つの整備分野を専門で担当するのですが、油圧系、通信関係、電気機器関係、操縦系とエンジンなどにあります。

その他にC-130で実際に飛行するクルーたちと協力してフライトスケジュールを作成します。

私の職業分野のユニークな点は、整備を担当すると決まってトレーニングを受けて、すぐに25人の整備班の責任者を任されました。今は164名が私の部下として働いています。

皆さんの中にはどうやってそんなにたくさんの人間を監督することが出来るのだろうと疑問に思っている方もいるかと思います。

このスライドの写真を見ていただくと分かりますが、私の隣にいる下士官の中に責任者がいるのですが、彼が私の右腕です。彼がしっかりとサポートしてくれますのでそのような多くの人間を監督することが出来るのです。

私の整備担当官としての経験で2年前に「クリスマスドロップ」に整備班の最高責任者として加わったのですが、28名の整備班を連れてグアムに行きました。その際に大変印象に残った体験がありますので紹介します。

私が「クリスマスドロップ」に参加して一生忘れないであろうと思うのは、C-130の主翼には凍結防止装置があるのですが、そこに問題が発生しました。

主翼の前縁部分を分解して修理することになったのですが、この装置を修理するのに60時間かかりました。その時、私と一緒にいた整備班の者が24時間体制で修理にあたったわけですが、12時間交代のシフトで本当に一所懸命に問題を解決しなければなりませんでした。

なぜこの話をしたかという、右の写真を見ていただくと分かると思いますが、私たち整備班1人1人は自分の仕事に強い誇りを持っています。航空機を修理することに関して非常に真剣で、また士気も非常に高いです。私の話は以上ですが、皆さんから質問があればお願いします。

【質問3】

C-130の寿命ですが、何年くらい飛べるのでしょうか。

【トムズ中尉】

私たち整備班は非常に優れた技能・技術を持っており、良く訓練されていますので、私たちのC-130は多くの時間と回数を飛ぶことが出来ます。定期的に航空機本体を分解して、摩耗している、または耐用年数を超えて古くなった部品は、新しい物と取り替えますので、この航空機の寿命は非常に長いです。具体的な年数はだいたい50年くらいです。

【質問4】

先ほどC-5やC-17の話もありましたが、それぞれC-130の何倍くらいの荷物を運べますか。

【モートン大尉】

分かりやすい説明をさせていただきますと、C-17が給油する燃料の重さがC-130が積載出来る荷物の最大量と同じです。

C-5の方が大きいのですが、C-5の給油する燃料の重さは、C-17が積載出来る荷物の最大量とほぼ同じです。

【トムズ中尉】

C-130が、だいたいどのくらいの大きさか、皆さんご存知ですね。

C-130の両翼を取り外すと、本体自体がC-5の中に楽々すっぽり入る大きさです。

【質問5】

C-130の整備費が年間で4億ドル、日本円では500億円近いということですが、1機あたりの整備費はどのくらいかかるのですか。

【トムズ中尉】

1機あたりでこれくらいというのはC-130がどのようなミッションで飛ばなければいけないかにもよるものです。例えば、エンジンだけでもコスト的には何億円もかかります。ただ、空軍には1つ良いところがあり、「ほとんど全ての物を一切無駄にしないで、同じ物を修理しながら使い続ける。」ということです。

【質問6】

横田基地の滑走路についてですが、パイロットから見て横田基地の滑走路は、地形とか風向きとか、離着陸しやすい飛行場なのかということと、現状の横田基地は、離発着する航空機があまり多くないと思っていて、武蔵村山市では、横田基地を民間航空機にも利用させてもらおうという運動を行っているのですが、現場の将校の皆さんは民間航空機と一緒に飛行場を使うことについてはどう思いますか。

【モートン大尉】

私はパイロットではないので、ナビゲーターの立場から言わせてもらいますと、横田基地の滑走路というのは非常に使い勝手の良いものだと思います。

日本政府の皆さんが用意してくださった、また、私たちもあちらこちらと工事をした部分もあるのですが、とても良い滑走路です。

ただ、民間との共同使用ということに関しては、私の立場からは言えることはなく、分かりませんので回答は差し控えさせていただきたいと思います。

【質問7】

耳のお医者さんに質問ですが、飛行機で高度の高い所を飛んだとき、気圧が違うので何か耳の障害が起こりますか。今の飛行機は気圧などは、ずいぶん配慮して設計されていると思うのですが、高い所や低い所を飛ぶと、当然、気圧が違うため、耳に障害が発生するのかをお聞きしたい。

【ベイカー大尉】

私の乗組員は気圧の違うところへ行って、耳がおかしくなるのをどうやって治すかというのは、訓練しているので大丈夫です。

【モートン大尉】

鼻をつまんで耳抜きをすると気圧で引っ込んでいる鼓膜が戻ります。

【ベイカー大尉】

飛行機の乗組員になった最初の日から、健康上の理由、例えば風邪をひいているとか、蓄膿症などで耳を患っているとかいう場合は、治るまで飛行機には乗ってはいけません。無理して乗ると鼓膜が破れるとか、もっと酷い病気になる可能性がありますので、徹底して教育されます。

【質問8】

それに関連して、C-130には気圧を調整する装置はあるのですか。昔の飛行機はそういうものが無く、耳に障害を受けたものです。C-130の場合は高い高度を飛ぶわけですから、何かそういう気圧を調整する装置があるのでしょうか。

【トムズ中尉】

答えはイエスです。C-130は気圧が高くなったり低くなったりした場合は、機体後部のランプという部分にバルブというのがあって、それを開いて気圧を調整することができます。

【質問9】

どんな飛行機にもその装置があるのですか。他の大型の飛行機にも、そのような装置が付いているのですか。

【トムズ中尉】

他の大型飛行機にも同じようなものが付いております。

【質問10】

広報部長が来られているので質問ですが、15年か20年ほど前に、自衛隊の立川基地にモニター制度というものがありません。モニターというのは、近隣地域の住民の方々から、自衛隊に協力的な人間をピックアップして、1年ないし2年間くらい登録するという制度です。

何をやるかという、特別なことはなくて、立川基地に入って基地の活動、災害派遣や救援活動などについて、説明を受けるわけです。時には自衛隊のヘリコプターの体験搭乗があったり、航空祭とか、観桜会というような、基地の中のいろいろなイベントにも招待されて、基地の人と交流します。

モニターは年1回のレポート提出が求められます。今の立川基地がどういうことをやっているか、一般的な自衛隊に対する意見などをレポートにまとめます。報酬というのはまったくありません。横田基地あるいは米軍に、それと同じようなシステムはあるのでしょうか。

【ジェフリー広報部長】

すばらしい質問ありがとうございました。

自衛隊のためにそのようなお時間を割いていただいてありがとうございます。私たちも自衛隊とは非常に良い関係を維持しており、常に協力しながら働いておりますので、その意味からもありがとうございます。

ご質問に対する答えですが、こちらにおります高橋が横田基地の渉外主任をしております、高橋が地域との繋がりに関しては責任を持っております。

ただ、空軍に関していうならば、「キー・リーダー・プログラム」というものがあります。横田基地には7つの友好クラブを通じて、日頃より基地と周辺地域の関係の維持向上を図っております。1つ1つのクラブが横田基地の各群とパートナー関係を組んで、それぞれにお付き合いをしています。

例えば武蔵村山市においては、第374運用群がお互いに交流を図っていて、その中において隊員は自分たちの任務について友好クラブの人たちにお話ししたり、逆に横田基地に来ていただいて、基地の中を見ていただくといったことを行っています。

自衛隊のモニター制度については、個人的には良いアイデアだと思います

が、我々にはそのような制度はありません。

【ヒッキー大尉】

私は、横田基地に来る前、ペンタゴンに勤務しておりました、儀典庁に所属していたのですが、アメリカ本国においては、四つ星の将官が、「シビリアン・プログラム（民間人プログラム）」というものを行っておりました。

このプログラムは、四半期に1度、将官とミーティングをもって軍に関する様々な動きを話し合うのですけれども、セキュリティ上の理由から、これを行うことが許されていたのは、将官クラスの者のみでしたので、横田基地で言えば、在日米軍司令官のアンジェラ中將などが許されております。

ただ、セキュリティ上の理由から、このプログラムは徐々に縮小されてきて、現在では非常に小さなスケールでしか行っていないのですが、アメリカ本国においては、そういったものは存在しております。

では横田でそれを行うことが出来るとか、出来ないということとは言えないのですけれども、ペンタゴンで行われていた「シビリアン・プログラム」は、米軍の支援者である民間人が軍の高官といろいろ意見交換を行い、それを地元を持ち帰って近隣の人に話をするというので、軍に対する理解と協力を得ることが目的だったのですが、そういうことは可能ではあるかと思えます。ただし、横田基地でそういうことをするかしないというのは、私が決定出来ることではないので、それに関しては別問題ということになります。

【ジェフリー広報部長】

もう8時近くになってきましたが、あと1つ何か短い質問であれば、お受けすることが出来ますので、何かありますか。

【質問11】

C-130の通常の飛行高度はどれくらいでしょうか。一番高く飛んだ場合は、どのくらいの高度まで飛べるのですか。

【モートン大尉】

C-130は、主に低い高度で飛ぶというのが、一番やりたいところなのです。私たちの任務は低い高度で飛ぶというのが、非常に重要になってきます。被災地の映像を見て貰えれば分かると思います。

最高高度であれば、3万1千フィート辺りまでは上がって行くことが出来ます。日本においては、最低高度というのは日本政府と取り決めがありますので、地上1千フィートが一番低く飛べる高度になっております。ただし、アメリカ

本国では、最低高度3百フィートまで可能になっております。もちろん日本ではやりません。もしも日本で1千フィートより低く飛んで、その事実が判明した時には、パイロット資格が即剥奪になりますので、1千フィートというのは、何があっても守らなければいけない条件です。

【ジェフリー広報部長】

今日の講師を代表しまして、北関東防衛局の皆さんにはこのようなセミナーを企画、開催していただき、大変ありがとうございました。

また、御静聴いただいた皆さん、大変ありがとうございました。また、何かの機会に皆さんとお話しすることが出来ればと思います。

本日はどうもありがとうございました。

【司会】

本日はどうもありがとうございました。